慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾図書館蔵『酒呑童子』翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2004
Jtitle	三田國文 No.39 (2004. 9) ,p.27- 39
JaLC DOI	10.14991/002.20040900-0027
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20040900-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾図書館蔵『酒呑童子』翻刻

石川　透

凡例

本書は、慶應義塾図書館蔵の室町物語『酒呑童子』である。本書の挿絵の影印は、石川透『慶應義塾図書館蔵　図解御伽草子』（慶應義塾大学出版会、二〇〇三年四月）に含まれている。解題等は、そちらを参照していただきたい。

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「　」『　』括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。

しゆ天童子　上　（題簽）

むかし、わか朝のことなるに、天地ひらけしよりこのかたは、神こくといひなから、又は、ふつほうさかんにて、人皇のはしめより、えんきのみかとにいたるまて、わうほうともにそなはり、まつりことすなほにして、氏をもあはれみ給ふこと、けうしゆんの御代とても、これにはいかてまさるへき。

しかれとも、世の中に、ふしきのことの出来たり。たんはのくに、大江山には、きしんのすみて、日のくるれは、きんこくたこくのものまても、かすをも知すとりて行。みやこのうちにてとる人は、みめよき女はうの、十七八をかしらとして、これをもあまたとりてゆく。

いつれもあはれはおとらねとも、こゝに、ものゝあはれをとゝめしは、院に宮つきたてまつる、いけたの中納言くにたかとて、御おほえめてたくし、たからはうちにみち〳〵て、ふつきの家にてましますか、ひとりひめをもち給ふ。

三十二さうのかたちをうけ、ひしんのひめ君を、見きく人、心をかけぬものはなし。ふたりのおやの御てうあひ、なのめならす。かほとにやさしきひめ君を、ある日の暮のことなるに、行かたしらすうせ給ふ。

ちゝくにたかをはしめとし、きたの御かたの御なけき、おちやめのとや女はう達、そのほか、ありあふものまても、うへをしたへとかへしける。

中納言は、あまりのことのかなしさに、さこんをめされ、「いかに、さこん、うけ給はれ。此ほと、みやこにかくれなき、むらをかのまさときとて、名よのはかせのありときく。つれてま

いれ」と、おほせける。「うけ給はる」と申て、つれて御しよへそまいりける。

いたはしやな、ちゝくにたかも、みたいところも、はちも人めもいらはこそ、はかせにたいめんめされつゝ、「いかに、まさとき、うけ給はれ。それ、人のならひにて、五人十人ある子さへ、いつれをろかはなきならひ、身つからは、たゝひとりのひめを、ゆふへのくれほとに、ゆき方しらす、みうしなふ。ことし十三、とらのとし、むまれてよりもこのかたは、えんよりしたへおるゝさへ、おちやめのとのつきそひて、あらき風をもいとひしに、まよひへんけのわさならは、みつからをも、もろともに、なとや、つれてはゆかさりし」と、たもとをかほにをしあてゝ、「うらなひ給へ。はかせ」とて、れうそく万ひき、はかせかまへにつませつゝ、「ひめか行ゑをしるならは、かすのたからをえさすへし。よく〳〵うらなひ（数字欠カ）」。

［挿絵・第一図・欠］

もとより、はかせは、めいしんにて、ひとつのまきものとり出し、くたんのていをみわたし、よこ手をちやうとうち、「ひめ君の御ゆくゑは、たんはのくに、大江山のきしんかわさにて候なり。御いのちにはしさいなし。なを、それかしかほうへんにて、えんめいといのらん。なにのうたかひあるへきそ。此うらかたをよく見るに、くはんせおんに、御きせいあり、くはんおんへ御まいりあり、よきに御きせいましまさは、ひめきみ、さうなくみやこにかへらせ給はん」と、見とをすやうにうらなひて、はかせはわかやにかへりける。

中なこんも、みたいところも、きこしめし、「これは、ゆめかや、うつゝか」と、なけかせ給ふ御ありさま、なにゝたとへむかたもなし。

中なこんとのは、おつるなみたのひまよりも、いそき、たいりへそうもんありけれは、みかと、えいらんまし〳〵て、くきやう大しん、あつまりて、いろ〳〵せんき、まち〳〵也。

その中に、くはん白との、すゝみ出、「さかの天わうの御代のとき、これにたりしことありしに、こうほう大しのふうしこめ、こくとをさつて、しさいなし。さりなから、今こゝに、らいくはうをめされつゝ、『きしんうてよ』との給はゝ、さたみつ、するゑたけ、つな、きんとき、ほうしやうをはしめとし、この人〳〵には、おにかみも、おちをのゝきて、おそれをなすと、うけ給はる。此ものともに、仰せつけられ候へかし」。

みかと、「けにも」とおほしめし、いそき、らいくわうをそめされける。

よりみつ、ちよくをうけ給はり、いそき、さんたいつかまつりけるに、みかと、えいらんまし〳〵て、「いかに、よりみつ、うけ給はれ。たんはのくに、大江山には、きしんかすみて、あたをなす。わかくになれは、そつとのうち、いつくに、きしんのすむへきそ。いはんや、ちかきあたりにて、人をなやますいはれなし。はやく、たいらけよ」とのせんしなり。

よりみつ、ちよくめいうけ給はり、「あつはれ、大しのせんしかな。きしんは、しんつうへんけのものなれは、うつてむかふとしるならは、ちりや木のはと身をへんし、われらほんふのまなこにて、見つけん事はかたかるへし。さりなから、ちよくをは、いかて、そむくへき」。

［挿絵・第二図］

いそきにかへりつゝ、人〳〵をめしよせて、「われらかちからにては、かなふまし。仏神にいのりをかけ、神のちからをたのむへし」。「もつともしかるへし」とて、よりみつとほうしやうは、やはたにしやさんありけれは、つな、きんときは、すみよしへ、さたみつとするゑたけは、くま野へさんろうつかまつり、さま〳〵の御りうくはん、もとより、ふつほう、神こくにて、神もなふしゆまし〳〵て、いつれも、あらたに御利しやうあり。

［挿絵・第三図］

よりみつ、おほせけるやうは、「このたひは、人あまたにてかなふまし。以上六人か、山ふしにさまをかへ、山路にまよふふせいにて、たんはのくに、おにかしやうへたつねゆき、すみかたにもしるならは、いかにも、ふりやくをめくらして、うつへき事はやすかるへし。めん〳〵、おひをこしらへて、くそく、かふとを入給へ。人〳〵、いかに」とありけれは、「うけ給る」と申て、めん〳〵、おひをこしらへける。

まつ、らいくはうのおひには、らんてんくさりと申て、ひおとしの御よろひ、おなしけの五まいかふとに、しゝわうとこそ申けれ。千すいと申せしつるき、二しやく一すん候しをおひの中にそいれ給ふ。

ほうしやうは、むらさきおとしのはらまきに、おなしけのかふとをそへ、いはきりと申て、二しやくありけるこなきなた、ふたへにかねをのへつけて、三そくあまりにねちきりて、おひの中へそ入給ふ。

つなは、もえきのはらまきに、おなしけのかふとをそへ、おにきりといふ太刀を、おひの中にそ入給ふ。

さたみつとするゑたけ、きんときも、おもひ〳〵のはらまきに、おなしけのかふとをそへ、いつれもおとらぬつるきを、おひの中にそいれにける。

［挿絵・第四図］

さゝへと名つけて、さけをもち、火うち、つけたけ、あまかみを、おひのうへにそとりつけて、思ひ〳〵のうちかたな、ときん、すゝかけ、ほらのかひ、こんかうつえをつきつれて、日本こくの神ほとけに、ふかくきせいを申つゝ、みやこを出て、たんはのくにへといそかせ給ふ。

この人〳〵のありさまは、いかなる、てんまはしゆんも、おそれをなすへきとおほえたり。いそかせ給へは、ほともなく、たんはのくにゝきこえたる、大江山にそつき給ふ。

さるほとに、こゝに、しはかる人にゆきあひて、よりみつ、おほせけるやうは、「いかに、山人、このくにのせんちやかたけは、いつくそや。おにのいわやを、ねんころにをしへてたへ」とそ、おほせける。

山人、このよし、うけ給はり、「このみねを、あなたへこえさせ給ひつゝ、又、たにみねのあなたこそ、おにのすみかと申て、人けん、さらに行ことなし」と、かたりける。

よりみつ、きこしめし、「さらは、このみね、こせや」とて、「たによ、みねよ」と、わけのほり、とあるいはあな、みたまへは、しはのいほりのその中に、おきな三人ありけるを、らいくはう、このよし御らんして、「いかなる人にてましますそ。おほつかなし」とそ、おほせける。

おきな、こたへて仰せけるは、「われ〳〵は、まよひへんけのものにてはなし。一人は、津のくにの、かけのこほりのものにてあり。一人は、津のくにの、おとなしさとのものにてあり。今一人は、京ちかき、山さきのものにてあり。此山のあなたなる、しゆてんとうしといふおにゝ、つまをとられ、むねんさに、そのかたきをもうたんため、このころ、こゝにきたりたり。きやくそうたちをよく見るに、つねの人にてましまさす。ちよくちやうをかうふりて、『しゆてんとうしをほろほせ』との、御つかひと見えてあり。此三人のおきなこそ、つまをとられて候へは、せひ、せんたちを申へし。おひをもおろし、心うちとけ、つかれをやすめ給ふへし。きやくそうたち」とそ申されける。

らいくわう、このよし、きこしめし、「おほせのことく、われ〳〵は、山みちにふみまよひ、くたひれて候へは、さらは、つかれをやすめん」と、おひともをおろしをき、さゝへのさけをとり出し、三人の人〳〵に、「御しゆをきこしめせ」とて、参らせける。

おきな、おほせけるやうは、「いかにもして、しのひいらせ給ふへし。かのおに、つねにさけをのむ。その名をよそへて、しゆてんとうしと名つけたり。さけをもり、えひて、ふしたるものならは、せんこをしらす候なる。この三人のおきなこそ、こゝに、ふしきの酒をもつ。その名をしんへんきとくしゆといひ、神のはうへん、おにのとくさけとよむもしそかし。このさけ、おにかのむならは、ひきやうしさいのちからもうせ、きるともつくとも、しるましき。御身たちか、このさけをのめは、かへつて、くすりとなる。さてこそ、しんへんきとくしゆとは、のちの世までも申へし。なを〳〵、きとくをみすへし」とて、ほしかふとをとりいたし、「御身は、これをきたまひて、きしんかくひをきりたまへ。なにのしさいもあるましき」と、くたんのさけをあひそへて、よりみつにこそ、くたされける。

［挿絵・第五図］

さて、六人のひと〳〵は、このよしを御らんして、「さては、三しやの御神の、これまてけんしましますか」と、かんるいきもにめいしつゝ、かたしけなくとも、中〳〵に、ことはにも、いひかたし。

そのとき、おきなは、いはやをたちいて、「なを〳〵、せんたち申さん」とて、せんちやうかたけをのほりつゝ、くらきいはあなを、十ちやうはかり、くゝりいて、ほそたに川にいて給ひ、おきな、おほせけるやうは、「この川かみを、のほらせ給ひて、御らんせよ。十七八なる上らうの、おはすへし。くはしく、あひてとひたまへ。きしんのうつへきそのときは、なを〳〵、われらもみつくへし。住よし、やはた、くま野の神、これまて、けんしきたる」とて、かきけすやうに、うせ給ふ。

［挿絵・第六図］

六人のひと〳〵は、このよしをみたまひて、三しやの神の、かへらせ給ふ御あとを、ふしおかみ給ひつゝ、をしへにまかせて、川上をのほらせ給ひて、み給へは、をしへのことく、十七八の上らうの、ちのつきたる物をあらふとて、なみたとゝもにましますか、よりみつ、このよし御らんして、「いかなるものそ」と、ゝはせたまへは、ひめきみ、このよしきこしめし、「さん候。身つからは、みやこのものにて候か、ある夜、きしんにつかま

れて、これまてまいりて候か、こひしきふたりのちゝはゝや、おちやめのとにあひもせて、かくあさましきすかたをは、あはれとおほしめせや」とて、たゝ、さめ〳〵となき給ふ。

おつるなみたのひまよりも、「あら、あさましや。このところは、おにのいはやと申て、人けん、さらにくる事なし。きやくそうたちは、これまてきたらせ給ふそや。いかにもして、みつからを、みやこへかへしてたひたまへ」と、おほせもあへす、たゝ、さめ〳〵となきたまふ。

らいくわう、このよし、きこしめし、「御身は、みやこにては、たれの御子」と、とはせ給へは、「さん候。身つからは、花そのゝ中なこんの、ひとり姫にてありけるか、われらはかりにかきらす、十よ人おはします。このほと、いけたの中納言くにたか卿のひめ君も、とられて、これにまします□□してをきて、そのゝちは、身のうちよりも、ちをしほり、さけと名つけて、ちをはのみ、さかなと名つけて、しゝむらをそき、くはるゝことのかなしみを、そはにてみるもあはれなり。ほり川の中なこんのひめ君も、けさ、ちをしほられ給ふそや。そのかたひらを、身つからか、あらふことのかなしさ、まことにものうき事そ」とて、さめ〳〵となき給へは、おにをあさむく人〳〵は、「けに、ことはり」とて、ともに、なみたにむせひ給ふ。

しゆ天童子　中　（題簽）

よりみつ、おほせけるやうは、「おにをたいらけ、御身たちを、こと〳〵く、みやこへかへさん、そのために、これまて、たつねまいりたり。おにのすみかを、ねんころに、かたらせ給へ」とありけれは、ひめ君、このよし、聞しめし、「これは、ゆめかや、うつゝかや。そのきならは、かたり申さん。此川かみを、のほらせ給ひて御らんせよ。くろかねのつゐちをつき、くろかねのもんをたて、又、そのうちには、つゐちをつき、あかゝねのもんをたて、くちには、おにかあつまりて、はんをしてこそゐたりけれ。いかにもして、もんよりうちへ、しのひいりて御らんせよ。るりのくうてん、玉をたれ、いらかをならへ、たてをきたり。その中に、四節の四季をまなひつゝ、てつの御所と名つけて、くろかねにて、やかたをたて、よるにもなれは、そのうちにて、我らをはしめ、あまたの女房をあつめ、あいせさせ、あしてをさすらせ、おきふし申せしか、らうのくちには、けんそくともに、ほしくまとうし、くまとうし、とらくまとうし、かねとうしとて、四天わうとなつけて、はんをせさせてをきけり。かれら四人のちからのほと、いかほと有ありとも、たとへん方もなきときく。しゆてんとうしかそのすかた、いろうすあかく、せいたかく、かみはかふろにをしみたし、ひるのあひたは人なれとも、よるにもなれは、おそろしき、そのたけ一ちやうあまりにして、たとへていはんかたもなし。かのおに、つねにさけのむ。えひて、ふしたるものなれは、わか身のうするもしらぬなり。いかにもして、しのひいり、しゆてんとうしにさけをもり、えひてふしたるところをみて、思ひのまゝに、うちたまへ。きしんは、てんめいつきはてゝ、つゐには、うたれ申へし。いかにも、さいかくおはしませ、きやくそうたち」とそ、仰ける。

［挿絵・第一図］

さて、六人のひと〳〵は、ひめ君のをしへにまかせて、川かみをのほらせ給へは、ほともなく、くろかねのもんにつく。はんのおにとも、これを見て、「こは、なにものそ、めつらしや。このほと、人をくはすして、人をこひけるおりふしに、くにん、なつのむしとんて、火に入とは、今こそ思ひしられたり。いさや、引さき、くはん」とて、われも〳〵といさみける。

その中に、おにひとり、申けるは、「あはてゝ、ことをしそんすな。かくめつらしきかなをは、わたくしにては、かなふまし。かみへ、ことはり、きよいしたいに、引さきくはん」と申ける。

「もつとも」とて、それよりも、おくをさして参りつゝ、此よし、かくといひけれは、

［挿絵・第二図］

とうし、このよし、きくよりも、「こは、ふしきなるしたいかな。何さま、たいめん申へし。こなたへ、しやうし申せ」とありけれは、六人のひと〳〵を、えんのうへにそ、しやうしける。

そのゝち、なまくさき風ふきて、らいてん、いなつま、しきりにして、せんこをはうする、その中に、いろうすあかく、せいたかく、かみはかふろにをしみたし、わうかうしのをり物に、くれなゐのはかまをきて、てつちやうをつえにつき、あたりをにらんて立たりしは、身のけもよたつはかりなり。

とうし、申けるやうは、「わか住山は、つねならす、せきかんかゝとそひえて、たにふかくして、みちもなし。てんをはしるつはさ、地をはしるけたものまて、みちかなけれは、くる事なし。いはんや、めん〳〵は、人けんとして、天をかけりてきたるかや。かたれ。きかん」とそ申ける。

よりみつは、きこしめし、「我らかきやうのならひとして、山路を家とする事は、我〳〵かみなかみに、えんのきやうしやと申せし人、みちなき山をふみわけて、五き、せんき、あつきとて、きしんのありしにゆきあふて、しゆもんをさつけ、えしきをあたへ、今にたえせす、とし〳〵に、えしきをあたへ、あはれむなり。此きやくそうも、そのなかれをくむ。ほんこくは、てはのはくろにすむものなりしか、大みね山にとしこもり、やう〳〵春にもなりけれは、みやこ一けん、そのために、ゆふへ、夜をこめ、立いつる。せんたうふみまよひ、みちあるやうに心えて、これまてきたりて候なり。とうしの御めにかゝる事、ひとへに、えんのきやうしやの御引あはせ、なによりもつて、うれしうこそ候へ。一しゆのかけ、一かのなかれをくむことも、みな、これ、たしやうのえんときく。御やとを、すこしかし給へ。御しゆをひとつ、もたせて候へは、おそれなから、とうしへも、御しゆひとつ申さん。我らも、これにて、御しゆ給はり、夜もすから、さかもりせん」とそ申されける。

［挿絵・第三図］

とうし、此よし、きくよりも、「さては、くるしうなき人か」と、えんよりうへへよひあけて、なをも、心をしらんため、とうし、申されけるやうは、「もたせの御しゆのありときく。我らも又、きやくそうたちにも、御しゆ一つ申さん。それ〳〵」とありけれは、「うけ給はる」と申て、さけと名つけて、ちをしほり、てうしに入て、さかつきそへ、とうしかまへにそをきにける。

とうし、さかつきとりあけて、らいくわうにこそ、さしにけれ。よりみつ、さかつきとりあけて、これも、さらりとほされけり。しゆてんとうしか、これをみて、「そのさかつきを、つきへ」といふ。「うけ給はる」とて、つなにさす。つなも、さかつきひとつうけ、さらりとこそはほしにけれ。

とうし、申けるやうは、「さかなはなきか」とありけれは、「うけ給はる」と申て、今きりたるとおほしくて、かいなともゝと、いたにそへ、とうしかまへにそをきにける。

とうし、このよし、みるよりも、「それ、こしらへて参らせよ」、「うけ給はる」とて、たつところを、よりみつは、御らんして、「それかし、こしらへ、給はらん」と、こしのさしそへ、するりとぬき、しゝむら四五寸、をしきりて、したうちしてこそくはれけれ。

つな、このよしをみるよりも、「御心さしのありかたさよ。それかしも給はらん」と、これも、四五寸、をしきりて、うまそうにこそくひにけれ。

［挿絵・第四図］

とうし、このよし、みるよりも、「きやくそうたちは、いかなる山にすみなれて、かゝるめつらしき、さけさかなをまいる事こそ、ふしきなれ」。

よりみつ、きこしめし、「御ふしんは、ことはりなり。我らかきやうのならひにて、しひとて給はるものあれは、たとへ、心にうけすとも、いなといふ事さらになし。ことに、かやうのさけさかなをくふに、うかひしいはれあり。うつもうたるゝも、ゆめのうち、そくしんそくふつ、これなるゆへ、くふに二つのあちはひなし。我らもともにうかふなり。あら、かたしけな」と、らいすれは、きしんにわうたうなきとかや、とうしも、かへりて、らいくはうを、らいはいするこそ、うれしけれ。

とうし、申されけるやうは、「心にそまぬさけさかなを、参らせけるこそ、ほいなけれ。よのきやくそうへは、むやく」とて、心とけてそみえにける。

そのとき、らいくわう、さしきをたち、くたんのさけを取出し、「これは、みやこよりの、ちさんのさけにて候へは、おそれなから、とうしへも、御しゆひとつ、まいらせん。御心みのためにに」とて、よりみつ、ひとつ、さらりとほし、しゆてんとうしにさし給ふ。

とうし、さかつきうけとり、これも、さらりとほしにけり。けにも、しんへんきとくしゆ、あら有かたや、ふしきのさけのことなれは、そのあち、かんろにのことくにて、心もこと葉もをよはれす、なのめならすによろこひて、「わかさいあいの女はうあり。よひ出して、のません」とて、くにたかのひめきみと、花そのゝひめきみを、よひいたし、さしきになをしけり。

らいくはう、このよし、御らんして、「これは、又、みやこよりの上らうたちにまいらせん」と、おしやくにこそは、たゝれけれ。

［挿絵・第五図］

とうし、あまりのうれしさに、えひほれ、申けるやうは、「それかしかいにしへを、かたりてきかせ申へし。ほんこくは、忍ちこのもの、山てらそたちのちこなりしか、ほうしにねたみあるにより、あまたのほうしをさしころし、その世にひえの山に

つき、『わかすむ山そ』と思ひしに、てんけうといふほうし、ほとけたちをかたらひて、『わかたつそま』とて、おひいたす。ちからをよはす、山をいて、又、このみねに住しとき、こうほうし大しといふえせものか、ふうして、こゝをもおひいたせは、ちからをよはぬところに、今は、さやうのほうしもなし。いまは、かうやの山ににうちやうす。今又、こゝにたちかへり、なにのしさいも候はす。みやこよりも、我ほしき上らうたちをめしよせて、おもひのまゝにめしつかひ、さしきのていを御らんせよ、るりのくうてん、玉をたれ、いらかをならへたてをきて、はんほくせんさんまのまへに、春かとおもへは、なつもあり、秋かとおもへは、ふゆもあり。かゝるさしきのそのうちに、てつの御所とて、くろかねにてやかたをたて、よるにもなれは、そのうちにて、女はうたちをあつめをき、あし手をさすらせ、をきふし申か、いかなるしよてんわうの身なり共、これには、いかてまさるへき。されとも、心にかゝりしは、みやこの中にかくれなき、らいくわうと申て、大あく人のつはものなり。ちからは日本にならひなし。又、らいくわうからうとうに、さたみつ、すゑたけ、きんとき、つな、ほうしやう、いつれもふんふ二たうのつはものなり。これら六人のものともこそ、心にかゝり候なり。それをいかにと申に、過つる春の事なるに、それかしかめしつかふ、いはらきとうしといふおにを、みやこへつかひにのほせしとき、七てうのほり川にて、かのつなにわたりあふ。いはらき、やかて心得て、女のすかたにさまをかへ、つなかあたりに立より、もとゝりを、むすととりつかんて、こんとせしところを、つな、このよしをみるよりも、三しやく五寸、するりとぬき、いはらきかかたうてを、水もたまらす、うちおとす。やう〳〵、ふりやくをめくらして、かいなをとりかへし、今はしさいも候はす。きやつはらかむつかしさに、われは、みやこにゆく事なし」。

　そのゝち、しゆてんとうしは、よりみつの御すかたを、めをもはなさす、うちなかめ、「さても、ふしきの人〳〵や。御身かすかたをよくみるに、らいくわうにておはします。さて、そのつきは、いはらきかかひなをきりし、つなにてあり。のこる四人の人〳〵は、さたみつ、すゑたけ、きんとき、ほうしやうとこそ、おほえたれ。我らかみるめは、ちかふまし。いふしう候。おたちあれ。是にありあふおにともよ、こゝろゆるしてけかするな。我らも、まかりたつそ」とて、いろをかへてそ、ひしめきける。

　らいくわう、此よし御らんして、「こゝをちんしそんするなら、ことの大事」とおほしめし、もとより、ふんふ二たうの人なれは、少しもさはかぬけしきにて、から〳〵と打わらひ、「さても、うれしのおほせかな。日ほん一のつはものに、山ふしともかにたるとや。そのらいくはうも、すゑたけも、なをきくたにもはしめにて、まして、みることはなし。たゝ今、おほせをよくきけは、あくきやくふたうの人ときく。あら、もつたいなや、あさましや。さやうの人には、にるもいや。我らかさやうのならひとして、ものゝいのちをたすけんため、山路を家とする事も、うへたるこらうに身をあたへ、うしやうむしやうをすくはんため、しやかむにによらいのいにしへは、しうふうと名をつけて、しよこくをしゆ行にいて給ふ。あるとき、山路をと

をらせ給へは、ふかきたにのそこよりも、なにものなるとはしらねとも、『しよきやうむしやう』ととなへけれは、たにゝくたりて御らんするに、九そく八めんのきしんとて、かしらは八つ、あし九つ、さもおそろしきおにそ有。しうふう、かれにちかつきて、『たゝ今となへしはんけのもん、われにさつけよかし』とある。きしん、こたへていふやうは、『さつけんことはやすけれと、うへにのそみてちからなし。人の身をたにふくするならは、となへん』とこそ申ける。しうふう、このよしきこしめし、『それこそ、やすきことなるへし。のこりのもんをとなふるならは、なんちかえしきに、それかしならん』と仰けれは、きしん、なのめによろこひて、のこりしもんをそ、となへける。『せしやうめつほう、しやうめつ〳〵ゐ、しやくめつゐらく』とゝなへけれは、しうふう、これをさつかりて、『あら、有かたや』とらいしつゝ、きしんかくちにいらせ給へは、すなはち、ほさつとあらはれ、きしんは、すなはち、ひるしやなふつ、しうふうは、しやか仏なり。又ある時は、これやこの、はとのはかりに身をかけしも、みなこれ、いけるをたすけんため、これにありあふ山ふし、おなしきやうにて候へは、もんをひとつさつけつゝ、はやく、いのちをめさるへし。つゆちりほともおしからし」と、さもありさうにの給へは、とうし、これにたはかられ、おもてのいろをなをしつゝ、「仰をきけは、ありかたや、かのやつはらか、これまては、よもきたらしとは思へとも、つねに心にかゝるゆへ、えひても、ほんちわすれす」とて、「御ちさんのさけにえひ、たゝ、くりことゝおほしめせ。あかきは、さけのとかそかし。おにと、なおほしめされそよ。われも、そなたの御すかた、うちみには、おそろしけれと、なれて、つほいは山ふし」と、うたひかなてゝ、心をうちとけ、さしうけ〳〵、のむほとに、これそ、しんへんきとくのさけなれは、五さう六ふにしみわたり、こゝろもすかたもうちみたれ、「いかに、ありあふおにともよ、かくめつらしき御しゆ、ひとつ、御まへにて下されて、きやくそうをなくさめよ。一さしまへ」とそ仰ける。

「うけ給はる」とたつ所を、よりみつ、此よし御らんして、「まつ、御しゆ一つ申さん」とて、ならひゐたりしおにともに、くたんのさけをもち給へは、五さう六ふにしみわたり、せんこも、さらにわきまへす。

その中に、いしくまうしは、すんと立て、まふたりける。

宮こよりいかなる人のまよひ来て
さけやさかなのかさしとはなる

「おもしろや」と、をしかへし〳〵、二三へんこそ、かなてけれ。

〔挿絵・第六図〕

此心をよくきけは、「これにありける山ふし共を、さけやさかなになすへし」との、歌の心とおほえたり。

やかて、らいくわう、おしやくにこそ、たゝれける。とうしかうけたるさかつきを、つな、此よしみるよりも、すんと立てそ、まふたりける。

としをへておにの岩屋に春のきて
風やさそひて花やちらさん

「おもしろや」と、これも又、をしかへし、二三へんこそ、まふたりけれ。

此歌の心は、「是に有あふおに共を、あらしに花のちることくになすへし」との歌の心を、おには、すこしも聞しらす、只、「おもしろや」とかんしつゝ、したい〳〵にえひほれて、とうし、申されけるやうは、「いかに、ありあふおにともよ、きやくそうたちを、よきになくさめ申へし。それかしか代くはんには、二人の姫をのこしをく。それに、しはらくおやすみあれ。明日たいめん申へし」とて、とうしは、おくにそ入にける。

しゆ天童子　下　（題簽）

残るおにとも、とうしのかへらせ給ふをみて、こゝやかしこにふしたる。さなから、しにんのことくなり。

らいくわう、このよし御らんして、二人のひめ君をちかつけて、「御身たちは、みやこにては、たれ人のひめにてましますそ」。「さん候。身つからは、いけたの中納言くにの、ひとりひめにてありけるか、ちかきほとにとられ来て、こひしきふたるのちゝはゝや、おちやめのとにあひもせて、かく、あさましきありさまを、あはれとおほしめせや」とて、たゝ、さめ〳〵となき給ふ。

「今一人の姫君は」と、とはせ給へは、「さん候。身つからは、よし田のさいしやうの、をとひめにてさふらひしか、中〳〵、いのちのきえやらて、うらめしさよ」と、かきくとき、二人の姫君もろともに、こゑもおします、きえいるやうに、なき給ふ。

よりみつ、このよし、きこしめし、「たうりなり。ことはりなり。さりなから、おにともを、こんや、たいらけて、御身たちを、みやこへ御とも申つゝ、恋しきふたりのちゝはに、けんさんせさせ申へし。おにのふしとを、われ〳〵に、ねんころにみち引給へ」とありけれは、ひめ君たちは、きこしめし、「これは、夢かや、うつゝかや。そのきにてあるならは、おにのふしとを、われ〳〵、よきにあんない申へし。御ようあれ」とのたまへは、

［挿絵・第一図］

らいくわう、なのめにおほしめし、「そのきにてさふらはゝ、めん〳〵、ものゝくしたまへ」とて、まつ、かたはらにそ、しのはれける。

さて、よりみつの出たちには、らんてんくさりと申て、ひおとしのよろひをめし、三しやの神の給はりし、ほしかふとに、おなしけの、しゝわうと申せし御かふとを、をしかさねてめされつゝ、ちすいと申せしつるきをもち、「なむや、八まん大ほさつ」と、心中にきねんして、すゝみ給へは、のこる五人のひと〳〵も、おもひ〳〵のよろひをき、いつれもおとらぬつるきをもち、女房をさきにたて、こゝろしつかにしのひゆく。

ひろきさしきをうち過て、いしはしをうちわたり、うちのていを見給へは、みな〳〵、さけにえひふして、「たそ」ととかむるおにもなし。

さて、のりこえ〳〵、み給へは、ひろきさしきのその中に、くろかねにてやかたをたて、おなし戸ひらに、くろかねのふときくはんぬき、さしかためたり。ほんふのちからにて、中〳〵、うちへいるへき。

［挿絵・第二図］

あらありかたや、三しやの神のあらはれ給ひつゝ、六人の人〳〵に、「よく〳〵、これまてまいりたり。さりなから、心やす

く思ふへし。おにのあし手を、われ〳〵、くさりにてつなきて、四方のはしらにゆひつけて、はたらくけしきはあるましきそ。よりみつは、くひをきれ。のこる五人のものともは、あとやさきに立まさり、すん〳〵にきり、すてに、しさいはあらし」との給ひて、もんの戸ひらをゝしひらき、かきけすやうにうせ給ふ。

「さては、三しやの神たちの、これまて、あらはれ給ふか」と、かんるい、きもにめいしつゝ、たのもしくは思へとも、をしへにまかせて、らいくわうは、かしらのかたに立まはり、ちすいをするりとぬき給ひて、「なむや、三しやの御神たち、ちからをあはせてたひ給へ」と、三度らいして、きり給へは、きしん、まなこをみひらきて、「なさけなしとよ、きやくそうたち。いつはりなしときゝつるに、きしんにわうとうなきものを」と、おきあからんとせしかとも、あしてはくさりにつなかれて、おくへきやうのあらされは、おゝこゑをあけてさけふこゑ、らいてん、いかつち、天地もひゝきわたりけり。

もとよりも、つはものとも、かたなはつるき、たちはやに、すん〳〵にきり給へは、くひは天にそまひあかる。されは、らいくはうを目にかけて、たゝ一かみとねらひしかとも、ほしかふとにおそれをなし、その身にしさいはなかりけり。

［挿絵・第三図］

かくて、あし手、とうまて、きりちらし、大にはさしていて給ふ。あまたのおにのその中に、「いはらきとうし」と名のりて、「しうをうちしやつはらに、手なみのほとをみせん」とて、おもてもふらす、かゝりける。

つなは、このよしみるよりも、「手なみのほとはしりつらん。めにものみせてくれん」とて、おふつまくつつ、しはしかほと、たゝかひけれとも、さらに、せうふは見えさりけり。をしならへて、むすとくみ、うへをしたへと、もてかへす。

つなかちからは三百人、いはらきかちからやつよかりけん、つなを、とつてをしふする。らいくはう、このよし御らんして、はしりかゝつて、いはらきかほそくひ、ちうに打おとせは、いしくまとうし、かねとうし、その外、もんをかためたる、十人あまりのおにともか、このよしをみるよりも、「今はとうしはましまさす、いつくをすみかとなすへきそ。おにのいは屋もくつれよ」と、おめきさけんてかゝりける。

六人の人〳〵は、此よしをみ給ひて、「やさしのやつはらや。手なみのほとをみせん」とて、ならひ給ひしやうほうを、とりいたさせ給ひて、あなたこなたへおひつめて、あまたのおにとも、ことくくたいらけて、しはらく、いきをそつかれける。

［挿絵・第四図］

よりみつ、おほせけるやうは、「いかに、女房たち、はや〳〵、いてさせ給ふへし。今は、しさいもるまし」と、のたまへは、このこゑをきくよりも、とられてましまし女はうたち、人屋のうちより、ころひおち、らいくはうをめにかけて、「これは、ゆめかやうつゝかや。われらをも、たすけてたひ給へ」と、われも〳〵と手をあけて、なけきかなしむありさまを、ものによく〳〵たとふれは、つみふかきさい人か、こくそつの手にわたり、むけん地こくにおとされしを、地さうほさつのしやくちやうにて、「をんかかゝせんさいそはか」と、すくひとらせ給ひしも、

かくやと思ひしられたり。

そのとき、六人のひと〳〵は、姫君たちをさきにたて、おくのていをみ給へは、くうてんらうかく、玉をたれ、四節の四季をまなひつゝ、いらかをならへてたてたるは、こゝろもことはもをよはれす。

又、かたはらを見給へは、しこつ、白こつ、なましき人、あるひは、人をすしにし、あるひは、木のえたにかけほして有もあり。あるひは、いきたえ、はんしのていにて、あし手をきられし人、中〳〵、めもあてられぬありさまなり。

その中に、十七八の上らうの、かたうておとされ、もゝそかれしか、いまたいのちはきえやらて、なきかなしみてまして、をよりみつ、みたまひて、「あのひめ君は、みやこにて、たれのひめ君にてましますそ」。

女はうたちは、きこしめし、「さん候。あれこそは、ほり川の中なこんのひめ君にてさふらふ」とて、いそき、そはにはしりよりて、「いかに、ひめ君、いたはしや。身つからともは、きやくそうたちの、おに、こと〳〵くたいらけて、宮こへつれてかへらせ給ふか、御身一人のこしをき、かへるへきかや、かなしやな。かくおそろしきちこくにも、御身に心のひかされ、あとに心のゝこるそ」と、かみかきなてゝ、「なにことにてもあれ、御心におほしめさるゝことあらは、われ〳〵に、かたらせ給へ。みやこへのほり候はゝ、御ちゝはゝに、よきにつたへて参らすへし。姫君、いかに」とありけれは、

［挿絵・第五図］

このよしをきこしめし、「うらやましの人〳〵やな。かくあさましきつゆの身の、はやくもさきにきえもせて、かやうのすかた、人〳〵に、みえまいらすることの、はつかしさよ。みやこにのほらせ給ひなは、ちゝはゝの、このことをしろしめされてさふらはゝ、わか身の事を、中〳〵に、なけき給はんことの、かなしさよ。『おもひのたねなれと、ひめかかたみ』との給ひて、わかくろかみを、きりてたへ。『このこそては、身つから、いまはのとき、きてきたる』とて、このくろかみをゝしつゝみて、はゝうへさまにまいらせて、『こせをは、かならす、とはせてたひ給へ』と、いとねんころに、いひつたへてたひ給へ。いかに、あれなるきやくそうたち、かへらせ給はぬそのさきに、身つからに、とゝめをさして給はれ」と、きえいるやうになき給ふ。

らいくわう、このよし、きこしめし、「けに、たうりなり。ことはりなり。さりなから、みやこにのほりて候はゝ、ちゝはゝに、このことを、よきにあんない申つゝ、あすにならは、むかひの人をくたすへし。心やすく思ひ給へ。いとま申て、さらは」とて、ものうきほらをたち出て、「たによ、みねよ」と打すきて、いそかせたまへは、ほともなく、大江山のふもとなる、下むらのさいしよにつく。

みつより、おほせけるは、「いかに、ところのものともよ。いそき、てん馬をふれさせよ。この女はうたちを、みやこへをくるへし。いかに〳〵」、おほせけれは、「うけ給はる」と申ける。

そのころ、たんはのこくしをは、大宮の大臣殿と申ける。このよしをきこしめし、「さても、めてたきしたい」とて、いそき、さつしやう、かまへ参らせける、そのひまに、馬にのり物にて、人〳〵を、みやこへをくり給ひける。

宮こには、このことを聞よりも、「らいくわうの御のほりを、けんふつせん」とて、さゝめきわたりて、ひかへたり。

［挿絵・第六図］

その中に、姫をとられし、いけたの中納言ふうふの人も、出給ひ、「いつくまても、あひしたい」と、「母うへさま」とて、なき給ふ。

はゝうへ、此よし、御らんして、する〳〵とはしりより、姫君に取つきて、「是は夢かやうつゝか」と、きえ入やうになき給へは、中納言も聞召、「一度はなれし我姫に、二たひあふこそ、うれしけれ」と、いそき、宿所に帰らせ給。

よりみつは、参内あり。みかと、えいらんまし〳〵て、御かんは申はかりなし。それよりも、国土あんせん長久に、おさまる御代とそ成にける。「かのらいくわうの、ためしすくなき弓取」とて、上一人より、下万民にいたるまて、かんせぬものはなかりけり。